

第二十九回和辻哲郎文化賞 学術部門受賞作

野矢 茂樹著 『心という難問 空間・身体・意味』

(2016年5月24日 講談社刊)

野矢茂樹 のや・しげき 東京大学大学院総合文化研究科教授

1954年(昭和29年)9月15日生まれ。63歳。東京都出身。

哲学

1985年3月、東京大学大学院理学系研究科科学基礎論専攻博士課程単位取得退学。1987年4月、北海道大学文学部助教授、1990年10月、東京大学教養学部助教授に転任、2007年4月、東京大学大学院総合文化研究科教授。

主著に『心と他者』一九九五年 勁草書房(2012年 中公文庫)、『哲学・航海日誌』1999年 春秋社(2010年 中公文庫)、『論理トレーニング101題』産業図書 2001年、『論理哲学論考を読む』2002年 哲学書房(2006年 ちくま学芸文庫)、『新版 論理トレーニング』2006年 産業図書、『大森荘蔵』2007年 講談社、『語りえぬものを語る』2011年 講談社、『哲学な日々』2015年 講談社。

受賞のことば

世界と他者の姿を見失ってしまう。そんな哲学的病いから自分自身を解放しようと、とぼとぼと行きつ戻りつしながらおぼつかない足取りで、ただひたすら考え、考え抜こうとしてきました。そして、『心という難問』という著作で、ようやく世界と他者とに再び出会えたと、少なくとも自分の中では納得するに至ったのです。薄暗がりの中を独り歩き続け、ようやく明るみの中に出たとき、そこに私の一応のゴールを祝福してくれる人たちがいました。それが私にとっての今回の受賞です。疲れた体と頭に、晴れやかな気持ちが広がります。

《選考委員評》

鷲田清一

至近距離からではないが、私はこれまで野矢さんの仕事を大いなる共感をもって注視してきた。

一つには、哲学の研究者でありながら、つねに「哲学研究」の外を意識して哲学の文章を紡いできたということがある。哲学の言葉を人びとに届ける、いや、人びととおなじ言葉で哲学の思考を研いでゆく、そしてそのために文のスタイルを練るとのことだ。それがほとんど哲学的思考の自然となるまでに。野矢さんは若い頃は先達の哲学思想を吟味し解釈する、ばりばりの哲学論文を書き、翻訳もしていたが、いまは丁寧で緻密な推論にさえついてゆけるならどんな読書人もなんの前提もなしに

読み通せるような論考を書く。ときに子どもにさえ巻きつく難問を、子どもも口にできる言葉で綴ってもきた。

二つめは、私たちの日常を一つの達成と見る姿勢だ。私たちが日々あたりまえのようにしている感覚や知覚を、思考と行動の地盤をなすものとしてとらえ、そういう生存のベースがどんな構造になっているか、その謎めいたありようを丹念に解き明かしてゆく。それがこの本のなかで試みられる素朴実在論の擁護と再構築という仕事、つまり「私たちが実物そのものを知覚しているという実感と、他人も私と同様に経験しているのだという実感を、理論的に掬いとろうとする」試みである。

〈世界〉とは私がいま、ここで経験しているものであり、またそうでしかありえない以上、私が意識していなくても存在しているはずのそういう〈世界〉を知るにもしかし、私の意識体験のありようから出発するしかないとする袋小路のような思考法が、西洋近代の哲学思考を縛ってきた。そのつどさまざまに現われてくるものと、その向こうにあって変化しないもの、つまりは〈意識〉と〈実在〉の二元論という枠組みである。この〈意識〉という枠を外して、〈世界〉がそこへと立ち現われてくる知覚と感覚とを、あくまでその接触面で分析しようというこの試みは、日本語で「見える」「聞こえる」といわれるような—《意識の哲学》が翻訳調で記すような「私は見る」「私は聞く」ではなく—、あるいは古代ギリシャ語で中動相といわれるような経験のありようを、〈眺望〉や〈相貌〉という概念を使って分析するなかで、〈世界〉の現われがそもそもある「^{フィクション}虚想」を、ひいては「意味」や「物語」を含み込んだ、他者たちとともになされる「公共」的な作業であることを示そうとする。

ヴィトゲンシュタインと大森荘蔵の議論の最良の部分を引き継ぎ、それを乗り越えてゆくかたちで展開されるこの仕事は、たんに経験の診断にとどまらず、それをめぐって旧来の哲学的思考が罹ってきた重篤な病を治療するところまで及んでいる。

関根 清三

哲学は常識を疑い、人々の思い込みに揺さぶりをかける。然しそれがアクロバティックな議論となって、日常から乖離した袋小路に陥ることもある。野矢茂樹氏の『心という難問 空間・身体・意味』は、そうした袋小路を突破すべく、新たな理論構成を試みて、常識を過不足なく読み解く思索の喜びへと、読者を誘おうとする。

氏が提案する新たな理論は、眺望論と相貌論である。眺望は五感を駆使した世界の捉え方であり、特定の一点からだけでなく、複数の立ち位置からの眺望と相俟って、客観的な世界理解を形成する。相貌は、そうした知覚の眺望が、個々人の生きている物語によって様々に意味づけられ、立ち現われて来る、その姿である。例えば、A君とBさんが、一緒に山に登ろうとして登山口に立つ。そこから

見上げる山頂、吹き下ろしてくる風、草木の香り、それらは山の眺望を形成しA Bに共通するはずだ。その際Aは植物の知識が豊富なのに、Bはその名すらもよく知らないならば、草木の香りが意味する相貌はAとBで異なるだろう。しかし同じ時間に同じルートで登山するという物語は共有でき、同じように眺望される山頂は、到達すべき目的という共通の相貌を持つと言ってよい。私の意識経験は私だけの脳内イメージであり、実在世界そのものは認識不可能であり、また他者の空間知覚や身体感覚は推測し得ないのではないかといった「心」をめぐる哲学的懐疑論は、このような眺望論と相貌論によって克服されなければならない。対象と関わる個々人のこうした心の難問の捉え直しを、野矢氏は明快で多岐に亙る考察の積み重ねの中で提案して行くのである。

もちろんこうした提案は様々な吟味に開いており、例えば相貌と対に語られる物語の内実や知覚経験を統合する脳が存在等々について、読者は更なる思考を促されるに違いない。とはいえ、このような独自の枠組みから従来の哲学的難問を解こうとする思索の冒険こそ多とすべきであり、このような作品を錚々たる学術部門の授賞作の歴史に加え得たことを喜びたい。

本部門授賞作は、この数年、広汎な資料を精緻に読み込んだ思想史的大作が多かった。それに対し今年度候補作は、自前の枠組みで独自の思考を展開した哲学書が目立った点に特色がある。野矢氏のお仕事と並んで、松永澄夫氏の『経験のエレメント』および『感情と意味世界』（ともに東信堂）、また永井均氏の『存在と時間 哲学探究1』（文藝春秋）などは、いずれも兄たり難く弟たり難い哲学的労作で、見方によっては授賞作は入れ替わっていたかも知れない。じっさい選考委員会でも見解は分かれ、僅差で野矢氏の作品が選ばれたという事実は、この年この国の哲学プロパーの分野での豊作ぶりを象徴し、慶賀すべきことだという点も付記しておきたい。

黒住 真

「私」は、在り方を捉えると、生きて働いている限り、「身体」と共に「心」をもち「空間」にあって他の物事——他の複数の私（他者）や物事——と関係してそこに「意味」を持ちます。その働きの中で私は「時間」を担って交流・把握・新陳代謝しながら生き続け、またある時間・空間・物事を経てやがて必ずや心身を持つものとしては死んで当の時空からは居なくなります。

この生きている私が心身において実際に担った物事を「経験」というなら、野矢茂樹氏の本書は、この生の経験の在り様を、さらに踏み込みまた包摂して「論理的」（哲学的）に捉えます。そこにある物事のただ拡散するのではない形成には、まず実際に心身における五感とよばれる味覚・知覚・聴覚・嗅覚・触覚があります。心身の感知による物事の形成は一体何であるのかを野矢氏は論理的に辿るのです。

このあたり、従来の把握では簡単には、感覚の度合い、さらに孕まれる記憶や意志や想像また夢が

あり、そこに把握する知としての「観念」がある。が、そこにはそもそも形作られる「実在」がある。また、その物事には大小や良し悪し——間違いや正しさが「価値」としてある。それらが大概、言語によって記録されており、そこに人間における生の形式がある、などと捉えられます。

こうした物事や価値の枠組みをめぐって、従来の哲学や宗教や学問は、観念の側と実在の側のどちらに結びつけるかで二派がまた関係の倫理が生まれたり、あるいは心身のどこかだけに結び付けて脳や心の科学が生まれたりしました。しかし野矢氏は、いま簡単に捉えてしまった二派や分化や関係には向かわない。実際の実在の側からの形成を具体的また哲学的に把握するのです。諸覚の総体ともいうべき感覚と知覚の現れ「眺望」、また公共的に関係付いた意味の現れ「相貌」を捉えます。そこに展開としての「物語」を見出し、またかく収まらない「幻覚」や「錯覚」なども位置付けます。詳細は読んでいただきたい。

本書はどのような哲学・学問でしょうか。哲学思想史に関係づけると、意外に道元がとらえた「現成公案」に似ています。ヴィトゲンシュタインが晩年に捉えた「生」にも似ています。中世まであった「融即」(participation)も論理的には繋がるようです。病をめぐっては、例えば認知症をどう捉えるか治すか、脳や薬だけでない心身の働きの把握として示唆を与えるようです。ともかく多くの把握が期待できます。

哲学者として野矢氏は大森荘蔵の更なる展開者とも私には見えます。その点で、最後に期待したいのは、野矢氏が難だけでなく易をも捉えて下さることです。すると大森や末木剛博が捉えた宇宙が見えてくるかもしれません。またヴィトゲンシュタインが好んだバツハは、人の望みの喜びを、現し出します。道元にも感交する道の繋がりがあります。そのあたりの関係から本書の心により時間と希望が宇宙と共に結びついてくるのでは、と期待するのです。